福野夜高行燈のリヨン遠征と「光の祭典」

阿南　　透*・広部　直子**

はじめに

本稿は，2011 年に行われた，富山県南砺市福野の祭り「福野夜高行燈」のフランス・リヨン遠征を扱ったものである。

このリヨン遠征は，リヨン市のイベント「光の祭典」に福野夜高行燈が招待参加したものであった。このように，祭りが本来行われる場を離れて，異文化の地でのイベントにゲスト出演する現象は，近年では珍しいことではない。そしてそのことが，招いた側のイベントや，招かれた祭りに影響を与えることも珍しくない[1]。今回のケースも，そうした波及効果が予想される事例であるが，まず本稿は，遠征におけるリヨン側と福野側の双方の様相を詳述し，今後の変化を研究する起点としたい[2]。

1. La Fête des Lumières de Lyon ── リヨン「光の祭典」

1.1　地方の祭りから国際的な観光イベントへ

フランス第 2 の都市リヨンでは，毎年 12 月 8 日前後の 4 日間，「光の祭典」が開催される。この 4 日間は，80 もの光の作品が町中に「展示」され，街全体が光の展示場と化す。作品は単独に設置されることもあるが，実存の建造物を利用した作品も多く展示される。特に，リヨン市役所に面する「テロー広場」では毎年，映像の投影と音楽を駆使した壮大なショーが繰り広げられる。

2012 年 11 月 30 日受付
* 江戸川大学　現代社会学科教授　民俗学
** リヨン日本人会　国際社会学

図 1　2012 年光の祭典のロゴ

現在はリヨンの冬の一大観光イベントである同「光の祭典」だが，そのルーツは 1852 年にさかのぼる[3]。リヨン市のフルヴィエールの丘には，聖母マリアを祭る大聖堂があり，礼拝堂の鐘楼が老朽化したことから，これを新しくすると同時に，金色のマリア像を建設することとなった。落成式は聖母マリア生誕日に合わせ，1852 年 9 月 8 日に決められた。ところが，洪水のためこの日は延期され，12 月 8 日に落成されることとなった。当日は花火等を伴う華やかな祭典が予定され，市民たちは祝典を盛り上げるために窓際をロウソクで飾る準備をしていた。しかし，この日も再び悪天候となり，マリア像は無事設置されたものの，落成式自体は 12 月 12 日に延期されることが決定された。しかしながら，リヨン市民達は窓際に小さなロウソクを灯し，街に繰り出して新しい聖母マリア像を祝福した。これが，リヨンの光の祭典の起源である。

地方の伝統的なお祭りが，現在の形へと変遷を遂げはじめるにあたっては，まず，1989 年，ミッシェル・ノワール市長政権時代に，200 以上の建

物を照らすライトアップ計画 Plan Lumière が実施される様になったことにはじまる。当時のリヨン市は「灰色の町」と表現されたように，地方工業都市として，鑑賞や観光に値する町とは見られていなかった。しかし，同計画によって，リヨン市の夜の風景は一転することとなる[4]。当時都市計画の一環として，ライトアップ計画を実施することが潮流となりはじめていたが，その中でリヨン市は先駆者的な位置づけにあった[5]。「光の町」としてのイメージを10年かけて確立した後，1999年より，レーモン・バール市長（在任 1995 年～2001 年）政権時代に，リヨン光のフェスティバル Festival Lyon Lumière として，12 月 8 日前後 4 日間の観光行事として再編される。ジェラール・コロン市長に代わると，Fête des Lumières 光の祭典と改名され現在に至る。

リヨン市によれば，光の祭典の開催期間中毎年 4 百万人が国内外からリヨンを訪れ，4 日間の間，同地の宿泊施設は満室となるという。

また，2010 年の統計によれば，光の祭典期間中にリヨンを訪問する観光客の 3 分の 1 はフランス国外からで，また，このうち 8%がアジアからの観光客と，国際的な観光ショーとなっている，としている[6]。

1.2　現代の「光の祭典」

「光の祭典」は，リヨン市のイベントとして市が運営実行委員会を設置する。2012 年の予算枠は約 190 万ユーロ（2012 年 12 月現在約 2 億円），昨年よりも若干少ない額となっている。このほか，リヨン市は 70 万ユーロ（2012 年 12 月現在約 7,500 万円）の「パートナー予算」を見込んでいる。これは私企業が「パートナー」として資金参加をするものである。光の祭典における私企業の提携は 2002 年より始まり，EDF（仏電力会社）及び Mat' Electrique（電気分野の常設展示サロン，グローバル企業 Sonepar の子会社）が創設メンバーとして出資し，今日に至る。2012 年には，その他約 55 社が参加している。日系企業では東芝が，昨年よりパートナーに名を連ねている。

協賛企業になると光の祭典ロゴを使用することが可能なほか，出資資金の 6 割を税控除することが出来る。また，少ない投資で高いビジヴィリティーが確保できる。

光の祭典の基本は光の「作品」の展示であり，出展作品は公開入札によって選ばれる。また，作品はイルミネーションのみならず音声とも組み合わされたものも多い。展示は全て野外にて行われる。プログラムの詳細はリヨン観光局を中心にパンフレットとして配布されるほか，公式ウェブサイトから入手することが可能である。2012 年祭典では 70 作品が展示される。

展示作品群の中で毎年最も注目が集まるのは，リヨン市役所に面するテロー広場の作品であり，2012 年は「ハイライト，光の光線」というタイトルの下，パリの照明作品事務所が担う。協賛はメインスポンサーの仏電力会社である。

また，この他，大学生・大学院生による展示プロジェクトや，一般公募でアイディアを募集し，照明作品事務所が再現することで建物をライトアップするプロジェクトなどがある。

祭典期間中の夜の時間は中心地内の自動車のアクセスは制限され，歩行者天国となり，展示物は徒歩・公共交通機関，そして自転車（リヨン市には貸自転車システムVelo'V がある）で回りながら楽しむ形となる。

1.3　福野夜高行燈の受け入れ

2011 年 12 月に開催される同祭典に，日本の福野夜高行燈が参加を招聘された。リヨン市が海外からの参加を招聘するのは同年が初めてのこと，これは同祭典を更に国際的なものにしたいという観点から実施されたものだった。海外からの参加団体を招聘することは既に決まっていた中で，特に夜高行燈が選ばれた理由は，3 月の東日本大震災の結果日本への注目が高まっていたこと，祭典実行員会アートディレクターに既にその素晴らしさが伝わっていた，ということであった[7]。

受け入れに当たっては，現地ボランティア参加が必要ということで，受け入れを担当した照明事務所 Congo Bleu より，現地日本関係の団体への打診があった。この結果，リヨン日本人会，

Espace Lyon-Japon（日本をテーマとした活動を行う企業），そして，中学校の一校が団体としてボランティア探しに協力した。また，リヨン日本人会に対しては別途， 遠方から来る「友人達」の滞在が豊かなものとなるようにアイディアが欲しい，と求められた。しかし，やり取りの中で，Congo Bleu 社のサポートの範囲にとどまっていては十分に支援できないということで，リヨン日本人会として独自のボランティア活動が組織された。到着時のホテルでの受け入れ，行燈組み立て中のおにぎりの差し入れ，自由時間における観光の同行，などである。これは，例えば初めての海外旅行者が多いのであれば，おにぎりの一つでも食べたくなるだろう…というアイディアを伝えても，フランス人は「米が食べたいのだろう」という理解にとどまってしまう。これは文化の違いによるものであり，「おにぎり」が何かを説明することからしないと先方には伝わらないのである。また，リヨンはパリのようにおにぎりを簡単に購入できる和風惣菜店もあまりなく，「おにぎり計画」は日本人会にしか実現できないことである…という風に同会の有志の意見が一致した。

当初はちょっとした仏側支援という話が，最終的にはイベントプロジェクトとして動かすかなり大掛かりなものとなった。かつ，金銭的リソースが無い同会に出来ることは，人的リソースを動員することだけであった。幸い，日本人会にはイベントを立ち上げる経験を既に持っているスタッフ達がいたため，短期間にプロジェクトが立ち上がり，多くの会員を動員して受け入れ態勢を作れることができた。

2. 地方経済政策の一環としての「光の祭典」

2.1 「光の祭典」，産業と国際化

「リヨン光の祭典」は観光イベントである一方で，同祭典を観光政策の枠組みのみでとらえることはできない。そもそも，現在の光の祭典へと発展するきっかけとなった「ライトアップ計画」は都市計画の観点から実施されたものであった。同時に，「光」のテーマを中心として，経済・観光活動を発展させ（地域経済政策），新製品及び新技術の発展に貢献し（技術政策），国際的な認知を高めること（国際政策）も目的としていた。

図2　光産業クラスターロゴ

こうした背景から生まれた同祭典は，伝統のみに依拠するのみにあらず，ローヌアルプ地方の経済構造の特徴を生かしながら計画され，発展して来ている。製造業の地方であるローヌアルプ地方には，「光」をテーマとした産業基盤が存在している。2008 年には，リヨン商工会議所のイニシアティブの元，「光」産業の主要企業が中心となって「光」産業クラスター Cluster Lumière が設立された。また，2002年には LUCI（Lighting Urban Community International, 光景観創造国際ネットワーク）がリヨンを拠点に立ち上げられ，光をテーマとして，光景観を重視する世界の他の都市とのネットワークづくりを図っている。

以下では光クラスター，LUCI を中心にリヨン地域を中心とした光をテーマとした経済政策，国際化政策について言及し，観光イベントの成功には多角的な政策のアプローチがいかに必要であるかを見て行くこととする。

2.2 「光」産業クラスター

2.2.1 光産業クラスターと光の祭典の関係[8]

光産業クラスターは，リヨン商工会議所のイニシアティブの下， PHILIPS 社，du Comptoir Lyonnais d'Electricité（電気機器販売の世界ナンバー 1 グループ SONEPAR の子会社），国家公共事業国立学院（ENTPE），CDO（照明関係の国際展示会 Lumi Ville を開催するイベント会社）の参加で，産学官連携により立ち上げられた。フランスで初めての照明産業クラスターの誕生であっ

た。

光産業クラスターの目的は二つあり，一つは新しい技術を取り入れながらイノヴェーションを強化すること，もう一つは地方経済活動への貢献である。ただし，加入に当たってはローヌアルプ地方を拠点としている必要は無い。クラスターが標榜している目的は上記二つだが，リヨン商工会議所は更に，ローヌアルプ地方照明産業・企業の国際化，を加えている[9]。

「光の祭典」は私企業の参加無くしては成り立たないイベントである。リヨン市のイベントとして市長の下，市役所職員が実行委員会を構成するものの，私企業が「パートナー」として資金参加をしている。 光産業クラスターの構成要因とこれらのパートナーが重複する。

また，光の祭典の作品の実現に当たっては，光産業クラスターに参加する様々なアクターが活躍する。この理由は，「光の祭典」においては全ての「光」産業クラスターがかかわる成り立ちとなっているからであり，以下にリヨン地域の「光」産業の構成を見ていくことにする。

また，リヨン市のライトアップ計画では，2014年において1989年当時と同じレベルの電気消費量に抑えることを目標としている。この一環で，光の祭典も省電力の方向性を目指し，結果的にLEDの利用が推奨されることとなる。LED照明の利用についての研究開発が，産業クラスターメンバーによって進められていることは，光の祭典におけるクラスター参加企業の活躍にもつながるものとなる。

2.2.2 リヨン地域の「光」産業[10]

照明産業市場は，大きく分けて3つ，屋外照明，屋内照明，そして信号機等の特別照明がある。リヨン地域は，このヴァリューチェーンの全行程のアクターが揃っていることに特徴がある。同地域には照明産業関連企業が300社集まり，約一万人を雇用している[11]。そのうち製造企業は62社，仏全体の12.2%を占め，売上げの8割はPhilips, GE, Osram, Sylvania Havellsといったグローバル企業によるものである。他方，近年環境保護の観点から，環境に優しい照明としてLEDの重要性が増して来ているが，多くのLED製造アクターはアジアを拠点とした企業である。更に，この下請けとして各部品の製造業が存在するが，部品そのものの製造からプラスチック，鉄鋼線など，多岐分野に渡るためにその実態を数値としてとらえるのは容易では無い。

リヨン地域で存在を指摘できるのは，照明設置業者であり，これは各家庭の配線やメンテナンスを行う「電気屋さん」から，建設現場に置ける照明設置，また，野外照明の設置を手がける企業までと大小多岐に渡る。

照明は設置するのみならず，そのマネージメントも必要であるが，環境の観点からその重要性は高まっている。リヨン市南部再開発地区コンフリュエンスでは，2011年より，エリア単位での効率的なエネルギー活用を行う「スマートシティー」の実証計画が始まっている。実証実験のテーマにおいては省エネルギーの実現のために省電力照明を使うほか，いかにこれらの省電力照明を管理するかという点も重要なポイントとなっている。尚，同実証計画は日本の新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）がリヨン都市圏共同体と共同で実施しているが，NEDO委託の日本コンソーシアムとして東芝が参加している。更に，同プロジェクトの中心となる建物の設計を担当するのは日本の建築家隈研吾氏であり，コンセプトは「HIKARI」である[12]。照明をいかにエネルギー効率よく建築物に取り入れるかということは，建築物の環境規制が厳しくなっている昨今重要性を高めている。2011年からの実施が義務づけられている[13] 建築基準RT 2012（年間エネルギー消費量を一平米辺50 KW以下に抑える）によって，この傾向は益々加速している。

照明デザインにおいても，照明器具そのもののデザインや内装のみだけではなく，建築物全体の照明コンセプト，屋外照明コンセプト全体のデザインを行う「コンセプター」の重要性が高くなっている。

更に，照明産業における研究開発機関の役割は，上記LEDの発展に伴って更に重要性が高まって

いる。フランスの照明を専門とする公的研究機関のうち，8割が同光産業クラスターのメンバーとなっている。製造業において言及したPhilips社も研究開発センターをリヨン地域に構えている。

その他の大手のアクターとしてはEDF（フランス電力公社），Schneider Electric（配電および工業オートメーションの世界的リーダー企業），Sonepar（電気関連の専門家向け備品・設備および技術ソリューションのディストリビューター），Thorn（専門家向けの室内および野外用照明ソリューション製造会社）が挙げられる。

最後に，ヴァリューチェーンの最下流には，小売店を通して一般消費者市場，企業消費者市場があるほか，地方自治体を買い手とする市場がある。都市計画の担い手は市町村及び市町村連合である。フランスで開催される環境・照明関係の展示会に行くと，多くの地方自治体がブースを出しているが，これは各都市の環境に優しく，先進的な取り組みを紹介することで，投資の促進を目的とした自治体マーケティングの観点から出展している他，クライアントとして各企業との折衝の場ともなっているのが特徴である。

また，リヨン市は産業ツーリズムに力を入れているが，照明関係の展示会は屋外の照明・公共照明を対象としたLumiville，屋内照明を対象としたLumibat，またLEDを取り扱うLEDフォーラム・ヨーロッパが同地にて毎年開催されている。

2.3 LUCI

2.3.1 「光の都市」の国際化

リヨン市は積極的な国際化政策を取っている。例えば，投資誘致を行うリヨン経済開発公社は1972年，フランスで最も早く出来た経済公社の一つである。また，リヨン都市圏共同体ほか，観光局，商工会議所，空港等，リヨン地域の公的アクターはONLYLYONという統一ロゴを使い，リヨンの「国際的」可視性の統一性を図っている。

リヨン地域の経済的優位性の検討の上，経済開発公社では「環境」「生命科学」「第三セクター」三つの柱を中心に誘致活動を行っている。「照明」産業は「エコ建築」と共に「環境」部門の一部として，専任の投資誘致活動員が活動している。

リヨン市は2001年より，光景観創造国際 ネットワークLUCIを主宰している。2012年11月現在，世界中の63都市が同ネットワークに参加しており，日本からは大阪府が参加している。また，一般企業もアソシエートメンバーとしての参加が可能であり，そのうちThoron, Philips, Shrederは投票権を持たない事務局メンバーとなっている（いずれもリヨン地域に何らかの拠点を持つ）。

同ネットワークの目的は参加メンバーが情報交換をし，ベストプラクティスを模索し，未来の都市照明の在り方を検討することにある。

LUCIは毎年の総会のほか，“City under Microscope”という名の下で，メンバー都市の取り組みを紹介する勉強会を開催している。2011年にはベルギー，エストニアで開催された。いずれも，毎年異なったメンバー都市において開催される。

これに加え，毎年1回，リヨンの光の祭典開催中にLyon Light Festival Forumというフォーラムが開催される。2011年では，32メンバー都市，20アソシエートメンバーが参加した。世界中から地方自治体の使節団が集まる機会であり，講演会，討論会の傍ら，情報交換の機会となっている。

2.3.2 「光の祭典」との関わり

LUCIによるこうした取り組みは光の祭典と同時に開催される。海外からの視察団の数は，2011年には45，そのうち32は自国における「ライトアップ」フェスティバルに展示する作品を選ぶことも目的としていた。当然ながら，この中には

図3 LUCIロゴ

LUCI 参加メンバーも含まれる。

「光産業」市場において，地方自治体は重要な買い手であり，都市照明のほか，こうした光のフェスティバルにおける作品の購入も行っている。実際，リヨンで発表された芸術作品の相当数は，リヨンを切っ掛けとして世界巡回が始まったり，作品の作者が有名となったりする。2008 年以来，既に 30 作品以上が，シンガポールの「ナイト・ライツ」や，「ライト・イン・エルサレム」といった他のフェスティバルにおいて，二度以上展示されている。2008 年以降，これらの作品を通じて，企画会社は 1,500 万ユーロ以上の売り上げを得ている[14]。光の祭典はいわば，照明イベントに関心の高い地方自治体という買い手に対する，屋外のショールームである。

2012 年の光の祭典では 70 作品の展示が予定されている。市の「ライトアップ計画」の進化を反映し，リヨンの光の祭典で展示される照明作品の選考に当たっては，「環境に優しい素材」を取り込んだ作品が考慮される。リヨン地域の「光産業クラスター」の目的の一つが，新しい技術を取り入れながらイノヴェーションを強化することであり，中小企業であっても「環境に優しい素材」利用の障壁を低くする手助けとなる。

このように，産業クラスター，他都市との連帯，そして観光イベントは，決して別々のものではなく，相互に関係し合いながら地方経済の活性化に貢献している。光の祭典は，観光イベントのみならず，照明産業企業の広告宣伝の場であり，事業のチャンスであり，地方自治体の国際交流の場であり，企画会社の海外進出の足場であり…と多様な側面を持っている。

3. 福野夜高行燈

夜高行燈は，富山県西部・砺波平野で 5〜6 月に行われる祭りである。南砺市福野，砺波市出町，砺波市庄川，小矢部市津沢の 4 ヵ所で大規模に行われるのが著名であるが，農村部でも各地で行われている。いずれも高さ 6 メートル程度の行燈山車を町内ごとに制作し，最終日には「引き合い」「突き合わせ」等と呼ばれる，行燈の「喧嘩」が行われるのが特徴である。それには，行燈同士を正面からぶつけ合う地域（出町，庄川，津沢）と，横に並べて壊し合う地域（福野）がある。ちなみに「夜高」の名は，「夜の高い出し物」から来ているという［福野夜高保存会 2003: 13］。行事の由来は，福野以外の場所では，田植え後の休みの時期に小型行燈を持って子どもたちが行列する「田祭り」が発展したものとされ，特定社寺の宗教行事ではない。しかし福野では，神社の創建と関連づけて次のように伝えられている。

> 「慶安 3 年（1650）に加賀藩から町立ての許可を得て，町作りが始まったばかりの福野では，慶安 5 年（1652）陰暦 2 月，大火で全戸が消失した。このため，町の平安無事のため神の加護を求めて，伊勢神宮の御分霊を勧請した。到着した一行が倶利伽羅峠にさしかかった時に日が暮れたので，町の人々が手に手に行燈を持って出迎えた。このことが夜高行燈の起源であるという。」［福野夜高保存会 2003: 7-8］

こうしたことから福野の夜高行燈は，5 月 3 日の福野神明社祭礼に奉仕する神事として 5 月 1〜2 日に行われる。大行燈のほか，中行燈や子ども用の小行燈も登場し，総数は20数本になる。

行事の様子を簡単に紹介しよう。

まず 4 月 30 日に，JR 城端線福野駅前で前夜祭が開催される。前夜祭の主役は，2000 年に作られた高さ 12 メートルの大行燈，通称「文久の大行燈」である。これは文久 2 年（1862）に高さ 4 丈（約 12 メートル）の大行燈が出たとの記録に基づいて復元したものである。前夜祭はこの大行燈の運行と，よさこいソーランなど地元のさまざまな団体の演技が行われる。

5 月 1・2 日は，夕方から夜にかけて，各町の行燈の練り回しが行われる。7 町から20を超える行燈が町内を回る（行燈の数には年により多少の差がある。2011 年の場合，大 7，中 4，小 12，合計 23）。そして 2 日夜には，大行燈のうち 6 本が「引き合い」と呼ばれる「喧嘩」を行う。3 つず

つ並んですれ違う際に一時停止し，行燈に乗った若者たちが相手の行燈を破壊するのである。行燈の紙がボロボロに剥がれ，竹が変形したり折れたりして，電球がむきだしになることもある。とはいえ勝敗が問題になるわけではない。引き合いが終わると「シャンシャン」と呼ばれる儀式がある。これは各町の役員である「裁許」全員が集合し，行燈の祭りを無事に終えたことを確認・報告して当番町を引き継ぐものであるが，最後に全員の手締めで締めくくることからこの名がある。行燈の祭りはここまでである。

5月3日は，午前中に4基の曳山（山車）が福野神明社に向かう。午後は神社の神輿が半日かけて福野の町を渡御するほか，曳山が各町内を巡行する。こうして一連の祭りが幕を閉じる。

このように，夜高行燈は福野神明社祭礼の一部を構成するのであるが，行事名は「福野夜高祭」として知られ，観光宣伝やポスターも「福野夜高祭」の名称で，行燈に焦点を当てたものになっている。砺波平野には行燈の祭りが広く分布する中で，最も歴史が古いことを福野の当事者は誇りにしており，行燈に対する思い入れがうかがえる。なお，曳山の方は戦後に中断期間があり，現在のように4基がそろったのは2005年からということもあって，まだ知名度が低い[15]。しかし曳山の出来映えは素晴らしく，屋台を所持する町内もあり，今後は曳山も注目を集める可能性がある。

4. 福野夜高行燈のリヨン遠征

4.1 発端と準備

今回のリヨン遠征は，リヨン市のイベント「光の祭典」へ参加するものであり，リヨン市側からの働きかけによるものであった。既述のとおり，光の祭典の主催者がアジアの行燈の招聘を計画した。相談を受けた日本のエージェントPARCOの担当者は福野夜高行燈を候補に挙げた。全国的に見ればあまり知名度の高くない福野夜高行燈を選んだのは，福野で毎年開催される音楽イベント「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」に関係しており，福野夜高行燈を知っていたためである[16]。2011年2月のことであった。ところが3月に東日本大震災があり，日本の復興と再建を願うリヨン市の思いから，災厄からの復興に由来する福野夜高行燈の招聘が決定した。

これを受けて福野側でも検討を始めたが，国内遠征は経験あるものの[17]海外遠征の経験はなく，準備は手探りといっていい状態で進んだ。最初は大型行燈4本が参加する案になっていたため，祭りが終了した直後の5月6日に，4町（上町，新町，横町，浦町）が参加する方向で折衝を開始した。しかし6月になって，リヨン側から大行燈3，小行燈2への変更依頼があった。これはサイズに変化をつけることで多様性を印象づけるとともに，リヨン側からもボランティア等でさまざまな参加が可能になるという狙いがあった。4町ではそれぞれ実行委員会を結成し，その中に庶務・渉外，行燈製作，輸送，渡航・宿泊の部会を設けてさまざまな準備に当たった。

7月13日，リヨン市長からの招請状が到着した。そこでリヨン市遠征事業実行委員会を結成して準備を円滑にすべく動き出したが，しかし経費については，福野側ではこの時点で3千500万円の予算を見込んでいたにもかかわらず，リヨン側は2千万円の負担で計画していることが明らかになった。このため，遠征実現のためには日本側での資金獲得が必要になった。そこで急遽，補助金獲得活動と協賛金募集を開始したところ，関係者の努力により，南砺市，富山県，国際交流基金，笹川日仏財団から補助金を獲得し，在フランス日本大使館が共催事業として取り組むこととなった。また現地ボランティアが着用するハッピに協賛広告を入れるなどして，企業からも協賛金を獲得することができた。

参加する4町はそれぞれ行燈制作を開始したが，解決すべき問題点が明らかになった。当初は福野で使用している行燈をそのまま持ち込む予定であったが，大行燈の高さは6.5メートルにもかかわらず，リヨンでは市内電車の電線にかからないよう，6メートル未満に抑える必要があった。このため行燈の改造が必要になり，大行燈を持ち込む新町では中心の柱である心木を切って短くした。上町

は最上部の山車を低く作り直した。横町は中行燈に変更した。小行燈を担当する浦町でも，リヨン遠征用に装飾を変更した。また，柱などの部材を縛る縄を持ち込むことができないため，ロープで代用することになった。行燈は船で輸送するが，熱帯地方を通過する際に高温で蠟が溶けないよう冷蔵コンテナを検討したものの価格が高く，通常のコンテナを使った。さらに事務局は，さまざまなリスト作成，通関手続きをはじめとする多様な書類作成に追われた。

光の祭典の主催者からは，市内中心部で4夜連続の行燈パレードを実施するよう依頼があった。それに加えて，祭りの歴史，行燈の制作過程，福野での祭りの様子，南砺市の概要，そして東日本大震災からの復興を伝える企画展を開催することになった[18]。このため展示パネルを作成するとともに，展示用に田楽行燈や提灯，武者絵，ハッピ等を用意した。

紆余曲折はあったが，完成した遠征用行燈は，いったん解体されて10月15日にコンテナに積み込まれ，福野を出発して名古屋港から船でリヨンに向かった。また，11月には事前打ち合わせのため団長と事務局長がリヨンを訪問し，主催者と詳細な打合せを行うとともに，リヨン日本人会に協力を依頼した。12月3日には福野神明社で旅の安全と遠征の成功を祈願した。そして，旅程の細部の決定が直前までずれ込んだものの，60名が福野から東京経由でリヨンに出発した。参加メンバーは，上町16名[19]，横町15名，新町14名，浦町8名，それに役員等7名の60名となった。12月という年末に近い時期に仕事を8日間休める者に限られたため，福野での祭りで行燈を動かしている若い世代には参加できない者も多く，年齢が高めの構成になった。

4.2　リヨンでの運行

12月6日深夜にバスで福野を出発した一行は，成田空港から3便に別れてリヨン入りした。7日は朝から，旧病院のオテルディユの中庭に仮屋根を設置して行燈を組み立てた。船舶で輸送した行燈は破損もなく無事に到着していた。組み立ては順調に進行した。大行燈の組み立てに使用する重機の操作や，バッテリーの準備と配線はフランス人技術者が行うことになっているため，リヨン日本人会の方々に通訳をお願いして指示を出した。オテルディユは期間中の行燈の収納場所であるほか，現地本部となり，出発前の食事，ミーティング，リヨン側主催者やリヨン日本人会との打合せ，現地ボランティアの受付などもここで行った。

また，7日午後には市庁舎アトリウム内で展示を準備した。祭りの様子と行燈の製作過程，南砺市の概要などを説明するパネル24枚のほか，武者絵，提灯，ハッピ，ミニ行燈，田楽行燈などを展示した。ちなみにこのアトリウムは，プロジェクションマッピングを上映するテロー広場に面しており，光の祭典開催中は非常に多くの入場者があった。

8日午後には，役員がリヨン側運行担当者とともに，運行コースの下見を行った。ここで道路状況や，ガードレール，街路樹，電線などの障害物の位置をチェックし，人混みを通過する際の注意点などを確認した。

こうして準備が整い，いよいよ8日夜には初日の運行が始まった。6時20分に行燈5基をオテルディユ前の路上に出し，ボランティアも加わって，点灯せずにプレジダン・カルノ通りのスタート地点までゆっくりと移動させた。午後7時に，団長，リヨン市長らの拍子木を合図に囃子の演奏を始め，行燈に点灯した。そしてゆっくりとグレネット通りを進み，サン＝タントワーヌ通りなど

図4　ベルクール広場を進む福野夜高行燈

ソーヌ河沿いに南下し，サンテクジュペリ通りからベルクール広場へ，3時間かけてリヨン市の中心部を一周した。太鼓の音が遠くまで届くので観客を惹きつけ，行燈が非常に多くの観客の興味を集め，沿道にはぎっしりと人垣が並んだ。夜高節の唄と「ヨイヤサ」の掛け声が周囲に響き渡った。コースの終点はベルクール広場であった。観覧車があり多くの人が集まるとともに地下鉄駅もある，リヨンのランドマークの一つである。ここから，近くのオテルディユまで戻っていった。このように初日の運行を無事に成功のうちに終えることができた。

初日の運行が大きな問題もなく実施できたため，9日から11日まで，細かな変更はあったものの，ほぼ同じ運行を行った。好天に恵まれ，雨よけのビニールシートを使わずに済んだのは幸運であった。毎日，70〜80人のボランティアが運行に参加し，行燈を押した。ボランティアのほとんどはフランス人であったが，日本に関心のある者が多く，運行中に交流を深めることができた。またリヨン日本人会の全面的な協力を受け，運行中はそれぞれの行燈に通訳として同行し，ボランティアを取りまとめていただいたほか，日本食の差し入れ，市内の案内など献身的なご助力をいただいた。最終日には，遠征を締めくくるため，ベルクール広場とオテルディユでシャンシャンの儀を行った。これは福野では行燈の行事の無事終了を確認する儀式で，当番裁許長の挨拶と手締めで締めくくる。リヨンでは，団長，リヨン側責任者，それに4町の代表がそれぞれ挨拶をしたあと，手締めで締めくくりとした。

終了後は記念撮影を済ませ，ただちに解体作業に入った。行燈に貼ってある和紙は剥がしてボランティアに持ち帰ってもらった。骨組みは輸送できる大きさに分割して梱包し，コンテナに積んで，発送をリヨン側に託した。こうして4日間の遠征が無事終了した。

4.3　遠征団からの情報発信

リヨンでの運行の様子はさまざまなルートで福野に伝えられた。同行した『北日本新聞』の記者による記事が連日の紙面を賑わしたほか，web版の誌面にも写真と短報が掲載された。なお，『北日本新聞』は帰国後の12月18日に4ページの特集紙面を編集した。

次に，参加者の1人が遠征団のブログを開設して，リヨンから毎日の様子を伝えた。このほかfacebookでの情報発信も，少なくとも7名が行っており，光の祭典の様子だけでなくリヨンでの生活を思い思いに伝えた。こうして遠征団自身により，リアルタイムで情報が発信されただけでなく，日本からのコメントもただちに伝えられた。

帰国後の12月23日には，福野文化創造センターヘリオスで帰国報告会を開催した。地域の人の関心は高く，約600席の会場はほぼ満員になった。4町それぞれが出発前に担当者を決めて撮影・編集した動画を上映しながら，リヨンでの経過や，大好評であった旨を自らの言葉で語った。4町が上映した映像はのちにDVDに記録され，遠征の記録として各所に配布された[20]。

続いて2月27日には東京で，役員により報告会が行われた。これは在京の協賛団体への報告とともに，マスコミや旅行会社等への宣伝を兼ねたものであった，ここでは成功裏に終わったリヨン遠征の楽しげな様子だけでなく，福野での映像も紹介した。行燈を壊し合う引き合いの壮絶な場面に，初めて見る人はみな息をのんで見守っていた。インパクトのある宣伝になったように思われた。

4.4　好評の理由

福野夜高行燈は，日本での意味づけと離れてリヨンでもアートとして受け入れられ，光の祭典の主役級の扱いを受けた。好評を博したのは次のような理由が考えられる。

1. 映像より実物：光の祭典の名物は，広場の壁面を全部使ったプロジェクションマッピングをはじめとするさまざまな映像作品である。これに対して行燈はリアルな実物である。この点で希少価値があり，評価された。
2. 巨大な造型が動く：光の祭典には大型オブジェも登場したが動かない。また，カーニバ

ルのような山車パレードもない。6メートル近い大きな光の造型が動くことが驚きを持って迎えられた。

3. 紙の造型に驚き：日本の和紙が丈夫で優れていることは良く知られており，その和紙の造型として評価された。「布かと思った」という声もあったほどで，大きく複雑で精巧な造型を紙で作ることが驚きのようであった。解体後の和紙はボランティアの記念品として人気があった。
4. 細密な描き込み：大きな造型にもかかわらず，細かな点にも手を抜かず，小さな部分まできっちりと高密度に描き込んでいることが評価された。
5. ジャポニズムの魅力：行燈だけでなく，ハッピ，ハチマキ，提灯，太鼓，拍子木などの服装や小道具がフランス人の異国趣味を刺激した。行燈の造型も日本的なモチーフで興味を引き，特に鯉が人気であった。展示の中では武者絵が好評であった。
6. 音響効果：笛と太鼓の囃子，それに行燈を動かす合図の拍子木とかけ声が遠くまで響き渡り，効果を盛り上げた。

もちろん，天候に恵まれ，雨が降らなかったことが幸いしたことは言うまでもない。雨天時はビニールをかけて運行する予定であったが，ビニールをかぶった行燈であれば魅力は半減したであろう。

5. 波及効果

5.1 通常の運行との違い

リヨン遠征においては，福野での通常の運行では見られなかった次のような点があった。

福野の祭りでは，行燈の運行は町ごとに行う。歴史的なつながりのある一部町内を除くと他町とは対抗関係にあり，協力するような場面，例えば他町の行燈を押すような事態は通常はない。今回の遠征でも，4町それぞれに実行委員会を結成し，行燈製作をはじめとする準備を町ごとに行った。また，出発後の行動も，飛行機の便，ホテルの部屋割りから朝食の順番，市内見学のグループ分けに至るまで，すべてが町を単位にして行った。従って4つの祭りの合同遠征と見ることも可能なほどの行動パターンであった。しかしリヨンでは町を超えた協力が見られた。行燈保管場所であるオテルディユからの出入り口はゆるやかな傾斜があり，しかも地盤がぬかるんで軟弱になっていた。このため大行燈を出し入れする際には，4町のメンバーが協力して押さないと動かなかった。ベルクール広場でも軟弱な箇所があり，大行燈を協力して押す場面があった。

次に，運行にはボランティアの女性が多数参加した。単に行燈を押すだけでなく，男性と同様に行燈の上に立って拍子木を叩いた。福野では，大行燈を動かす際に女性が関与することはない。これは神事という理由によるものであるが，危険が伴う引き合いに女性を参加させない配慮もあるかもしれない。現在の行事をみると，女性を排除することで町の男性の結束を高め，引き合いへ向けて雰囲気を盛り上げ，行事のクライマックスである暴力的な破壊に至る，という構成になっている。しかしリヨン遠征は神事ではなく，交流と友好を重視している。また引き合いも行わない[21]。そこで女性の参加を積極的に容認した。

こうした，日本では見られない行動の結果が今後の祭りにどう影響するか，今のところは不明であるが，注目していきたいと考えている。

5.2 翌年の祭りへの影響

2012年の福野夜高祭は例年同様に行われ，内容に変化は見られなかった。しかしリヨン遠征の影響が所々に感じられた。

まず観客動員は2日間で8万3千人で，過去最高ではないかと言われた。2011年は東日本大震災の影響もあり6万3千人であったが，2010年の8万人を上回った。特に，従来はあまり人が来ないといわれた5月1日の人出が増えた。

福野夜高祭連絡協議会も，富山県の議会，行政，産業界などから来賓34名を招いて招待見学会を開催し，県内への広報活動に努めた。

「リヨン効果」はさまざまな所に見られた。ス

ピーチでは「リヨン遠征の成功」が「東日本大震災からの復興」と並んで決まり文句になっていた。空き店舗を利用したギャラリーでは「リヨン遠征写真展」が開催された。別のギャラリーではリヨン遠征の思い出を絵と文字を交えた手紙で紹介する「リヨン絵手紙展」が開催され，祭りの小道具やミニ行燈だけでなく，遠征の写真やリヨンの記念品で部屋中が埋め尽くされた。

また，リヨンからの訪問者もあった。光の祭典の主催者側でパレードを取り仕切ったメンバーのうち2人が，友人を連れて福野を訪れた。一行は，昼は高山御車山祭や南砺市内を見て回り，南砺市長と面談し，さまざまな会合へ招かれ，夜は行燈を一緒に曳き，観光課長の自宅に宿泊する等の大歓迎を受けた。また，リヨンでボランティアに参加したフランス人男性も友人とともに訪れ，リヨンで知り合った関係者宅に宿泊して祭りを楽しんだ。

このように福野夜高祭の知名度を上げる試みは，今回のリヨン遠征から始まったというよりも，少し前からの一連の活動の延長上にあると考えられる。実は，祭りの対外的な宣伝や観光への対応については，南砺市合併前の福野町時代には福野町商工会，2006年以降は福野夜高祭連絡協議会が全面的にバックアップして，地域振興を目的にさまざまな活動を行っている[22]。たとえば2000年に製作した高さ12メートルの大行燈，通称「文久の大行燈」を，さまざまな場面で地域を代表する大行燈として展示してきた。また，近年の国内遠征の増加や，金沢から代表団を招いた交流会など，夜高祭を地域振興に結びつけるさまざまな試みが始まっている。リヨン遠征はその一つの頂点と位置づけられるだろう。

5.3　他都市への影響

今回の福野夜高行燈のリヨン遠征は，同じ行燈の祭りを行う近隣地域にも刺激を与えたようである。

近年，他都市でも夜高行燈の知名度を上げるための活動が始まっている。砺波市出町では，「となみ夜高まつり」の名称で，商工会議所を事務局として祭りを運営し，広報活動も行ってきた。さらに，参加する町内を横断する有志組織「夜行会」による広報宣伝活動も活発である。夜行会では，2012年2月に東京で行われた首都圏在住・富山出身の若手交流ネットワーク「アコイコ」の集まりや，2012年8月の安城七夕まつりに夜高行燈の一部分（吊物）を持ち込み，となみ夜高まつりの宣伝に努めた。小矢部市津沢では，「喧嘩夜高」として商工会を中心に広報活動を始めている。また富山県商工会青年部連合会では，福野，出町，津沢，庄川の4カ所の夜高行燈を連携して盛り上げるべく，「となみ野の夜高を盛り上げる会」を結成して，知名度調査などの取り組みを開始した。砺波市庄川でも，夜行会と同様に町内を横断した組織が誕生したという。

このように福野夜高行燈のリヨン遠征は，周辺地域においても夜高行燈の価値を広く認めさせる大きなきっかけになったものと考えられる。

5.4　リヨン側への影響

日本からの代表団に延べ200名以上の日仏ボランティアが参加した福野夜高行燈の練り歩きは，熱狂を持ってリヨン市民に受け入れられたことは，その後の各報道から窺い知ることが出来る。報道テレビBFMTV地方版で「日本，光の祭典のスター」として紹介されていたほか，プログレ紙といった地方新聞でも賞賛を持って受け入れられた[23]。

福野夜高行燈の招致には，祭りを国際化したいというリヨン市の意思があった。2012年においては，海外からではなく現地リヨンの団体ではあるが，インドの影絵をテーマとしたパレードを，ボランティア参加において実現する。海外からの招致と言う形ではないにせよ，外国文化をテーマとしたパレード，そしてボランティア参加型という，昨年の形を踏襲する形となっている。これは，夜高行燈一行受け入れの経験が，リヨン市にとってポジティブなものとして受け入れられたことを意味する。

また，リヨン市とリヨン日本人会との関係にも影響を与えた。日本人会は既に，2011年4月に

震災ガラコンサートをリヨン市と共催することで，リヨン市との絆を強めていた。福野夜高行燈の受け入れにおいて，リヨン日本人会が積極的に関わったことは，リヨン市政への同会の更なる積極的な参加を意味する．実際，受け入れにおける活動資金の一部を，日本人会事務所があるリヨン2区に申請した所，小額であるが補助を受けている。また，現在，国際課の担当者と日本人会事務局が直接のコンタクトを持ち，補助金申請の準備を行っている。こういったことが可能となったのも，リヨン市民に福野夜高行燈が好意的に受け入れられたことと，そしてその受け入れにリヨン日本人会が奔走したことが間接的に影響していることは否めない。

日本人コミュニティーにおいては，福野夜高行燈の受け止め方について一般的な統計はないものの，ボランティア参加者には長期滞在者，駐在員，学生と，様々なプロフィールが参加し，故国の文化に触れることが出来る喜びを分かち合った。

リヨン日本人会自体も，このような大掛かりなイベントの受け入れの経験を通して，上記震災ガラコンサート開催に引き続き，「日本人会」の名を持つ団体にしか務められない役割を再確認する機会となった。現在のリヨン日本人会は，2008年まで活動をしていた「日仏センター」が閉鎖した後，新たな日本人の拠点となる場所として2009年に立ち上げられたものである。活動の中心となる役員，事務局含め，活動主要メンバーはほぼ全てボランティアであり，会員数は約200世帯，355人。リヨン市には約2,000人の日本人が住んでいると仮定すれば，決して多数が参加している会とは言えない[24]。更に，財源不足，人材不足の問題も抱えている。そのような問題を抱えながら，いかに日本人会として「公的な」役割を受け入れていくことが出来るのか。福野夜高行燈は，こうした課題に活動メンバーが正面から向き合う機会を与えてくれたと言っても良い。

《注》

（1）　たとえば青森ねぶた祭の海外遠征とその波及効果について，［阿南2008］でまとめている。

（2）　本稿は1〜2章及び5章4節を広部，3〜4章及び5章1〜3節を阿南が執筆している。

（3）　光の祭典公式サイト　http://www.fetedeslumieres.lyon.fr/HIstoire-d-une-fete_1

（4）　［Charbonneau, 2005］

（5）　［Lyon 2020, 2006］

（6）　リヨン経済開発公社（ADERLY）サイト2011年12月15日付ニュース記事『「光の祭典」：その影響とは？』より。

（7）　2011年11月下旬，リヨン日本人会事務所において，夜高行燈の受け入れを行ったCongo Blue社のStephane Guillet氏談。

（8）　特に注記の無い場合は，光産業クラスターのサイトを参照。

（9）　リヨン商工会議所サイト。

（10）　特に注記の無い場合，以下を参照：光産業クラスター報告書「ローヌアルプ地方の照明産業」，2010年7月。

（11）　リヨン経済開発公社の光クラスター紹介サイト記事より。

（12）　隈研吾建築都市設計事務所ウェブサイト。

（13）　個人建築は2013年より義務。

（14）　リヨン経済開発公社「光の祭典を振り返って」。

（15）　文化財指定の観点から見ると，行燈が2004年に富山県指定無形民俗文化財に指定されたのに対し，曳山は同年に南砺市指定有形民俗文化財に指定された。県指定と市指定の差は，決して優劣に基づくものではないが，ここにも現在の位置づけをうかがうことができる。

（16）『北日本新聞』2011年12月9日記事によれば，1998年のフランス・ワールドカップに福野夜高行燈を展示する企画を立てたものの実現しなかった経緯があり，今回はそのことを記憶していた関係者の配慮があったという。

（17）　国内遠征は，富山県内のイベントに数多く出場しているほか，1973年に東京・大銀座まつり，1989年に名古屋市制百年祭，1991年に香川県多度津市のたどつまつり，1996年に神戸まつり，京都まつり，2002年の伊勢神宮などがある［福野夜高保存会2003］。

（18）　阿南は当初，取材者として同行する予定であったが，企画展開催が決まったため，企画展コーディネーターとして遠征団の一員になり，パネル原稿の執筆と展示内容の監修をした。

（19）　上町16名の中には，歴史的につながりのある七津屋と御蔵町の在住者も入ったが，上町の一員として上町のハッピを着用しての参加であった。

（20）　遠征の公式な記録としては，「福野夜高行燈リヨン市遠征事業報告書」が福野夜高祭連絡協議会から発行されている。

（21）　主催者から，もし引き合いを行うと「観客が興奮して暴れる恐れがあるので行わないこと」と事前に強く要請を受けていた。

(22)「平成24年度福野夜高祭連絡協議会総会議案書」による。
(23) 各報道についてはCongo Blue社のサイトにリンクがある。
(24) 日本国外務省の在留邦人調査によれば，在リヨン出張官駐在事務所の管轄地方全体で約2,200人居住。2011年5月にリヨン経済開発公社の主宰した日系企業向けイベントにおいて，ダクラン国際関係担当副市長が述べたスピーチでは，リヨン地域だけで2,000人の日本人が居住している。

参考文献

阿南透 2008「祭りの海外遠征 ── ロサンゼルスの青森ねぶた」江戸川大学紀要『情報と社会』18, pp. 21–39。
福野夜高保存会 2003『万燈』福野夜高保存会。
福野夜高祭連絡協議会 2012『福野夜高行燈リヨン市遠征事業報告書』
Jean-Pierre Charbonneau,《in revue Topos》, 2005（ウェブサイト記事 http://www.jpcharbonneau-urbaniste.com/artlyon1.html）
Lyon 2020, Synthèse du Groupe de Travail Lumières, 2006（http://www.millenaire3.com/uploads/tx_ressm3/Lyon2020_lumiere.pdf）
光産業クラスター報告書「ローヌアルプ地方の照明産業」，2010年7月（仏語）。

インターネットサイト

リヨン市　www.lyon.fr
リヨン商工会議所　www.lyon.cci.fr
リヨン経済開発公社 www.aderly.com
リヨン光の祭典（公式）　www.fetedeslumieres.lyon.fr
光産業クラスター　www.clusterlumiere.com
LUCI　www.luciassociation.org
リヨン日本人会　www.lyon-japon.net
隈研吾建築都市設計事務所　www.kkaa.co.jp
Congo Bleu社　www.congobleu.fr
福野夜高あんどんリヨン交流会のブログ　http://blogs.yahoo.co.jp/andon2011lyon